

〈戦争〉の記憶

矢守 克也*

"War" as a metaphor

Katsuya YAMORI

要 旨

1995年に日本社会に起こった2つの大きな出来事、「阪神・淡路大震災」と「地下鉄サリン事件」、および、30年前に発生した「光化学スモッグ事件」は、さしあたって、その現相的光景の一致を礎に、いずれも、〈戦争〉という隠喩で語られた。本論では、まず、そうした隠喩の具体例を挙示しつつ、〈戦争〉という隠喩の使用は、単に、表層的な事象の一致に基づくのではなく、これらの出来事が、いずれも、一箇の生活世界、割切には、一箇の生活世界をそれたらしめている規範的規制が、総体として動揺・崩壊した状態（〈戦争〉）を招いた事実由来することを指摘した。次に、この規範的規制の動揺とは、廣松（1982）の言う「所与的契機—所識的契機成態」の根幹的動揺にほかならず、したがって、〈戦争〉の記憶とは、上記の二重成態の回復過程——前者に力点を置く「記憶」と、後者に力点を置く「記録」の2種類が想定される——であることについて論じた。

I. 〈空気〉と〈大地〉

ここに、3葉の写真がある。読者は、それぞれ、何と呼ばれる出来事を撮影したとされる写真がおわかりだろうか。「クイズ」の正解は、Photo 1が、「光化学スモッグ事件」（1970年）¹⁾、Photo 2が、「地下鉄サリン事件」（1995年）、Photo 3が、「東海村核燃工場臨界事故」（1999年）、である。3つの光景を虚心に眺めた場合に認められるであろう「共通性」と、これらが、現時点で、それとして定位されている3つの出来事の「異質性」が対照されたならば、冒頭から稚戯につきあっていただいた意味はあったかと思う。

なお、3葉の写真はいずれも、全国紙に掲載されたものである。参考までに、掲載時に付されたキャプションを列記しておこう。それぞれ、「公害最前線：ガスマスクも



Photo 1 光化学スモッグ事件（1970年）発生当時の光景



Photo 2 地下鉄サリン事件（1995年）
発生直後の光景



Photo 3 東海村核燃料工場臨界事故（1999年）
発生直後の光景

ものものしいおまわりさん。けさスタートした交通公害車検小隊は本多警視總監の激励を受けてさっそく最前線へ散っていったが、東京の大気汚染もついにここまで——」（Photo 1；「読売新聞」（1970年8月1日付））、「完全装備で駅構内へ入る消防庁の化学機動中隊」（Photo 2；「毎日新聞」（1995年3月21日付））、「防護服に身を固めた職員が、被ばくした作業員の放射線医学総合研究所への搬送にあたった。症状の軽い作業員（右から2人目）は歩いて入った」（Photo 3；「朝日新聞」（1999年10月1日付））である。

3つの光景に見いだされる「共通性」は、防毒マスク風の物体を装着した人物が、共通して、そこに撒き出されているという単純明快な事実にも、もちろん由来しよう²⁾。しかし、筆者の考えでは、より重要な事情として、3つの光景（防毒マスク風の物体）が、〈空気〉という自明にヒビを入れる媒体となっている点が明記されねばならない。すなわち、日常生活において、その存在や諸性質（例えば、それを呼吸して生きることができる、事実上無限に存在する、といった性質）が自明であり、したがって、それを防毒マスクを装着せず³⁾に呼吸するという行動を自明に可能たらしめている、〈空気〉という対象の自明性が、そこでは崩壊しているのである。別言すれば、先のごとき光景は、それまで想像の埒外にあった、空気を防毒マスクを装着して呼吸するという行動が現実的であること（そのような世界のあり方が存在しうること）を露呈させている³⁾。

特定の行動パターンを現実化させる一方で、その他の可能態を隠蔽化するという規範の働きは、実は、日常の生活世界に充溢しているのだが、ここで重要なことは、〈空気〉という対象、あるいは、それをめぐる人々の行動パターンに関する規範は、もっとも基底的な規範的規制の一つを成している点である⁴⁾。ここで、基底的とは、他の諸規範の効力が、〈空気〉の規範の実効性に依存しているという意味である。卑俗には、防毒マスクの装着が要請されるような状態に、空気があるとすれば、日常生活全般——食事をする、出勤する、机、クルマ等、その他諸々の活動や事物から成る——の存在と意味が根底から揺らぐ、ということである。3つの防毒マスクは、〈空気〉の非自明性を介して、生活世界全般の非自明性——今ある世界は、それが現実化してい

る以上、当然、可能ではあるが、けっして必然ではないこと……を暗示する点で、「共通性」を有していたわけである^{51, 61}。



Photo 4 阪神・淡路大震災の震源活断層（野島断層）



Photo 5 阪神・淡路大震災直後の神戸市長田区

〈空気〉の次は、〈大地〉である。地震という災害が、多くの自然災害の中でも、とりわけて強烈な印象を与えるのは、それがもたらす被害の甚大さもさることながら、〈大地〉という、〈空気〉と並ぶ、もう一つの自明が、文字通り揺らぐことに起因すると思われる。つまり、Photo 4（阪神・淡路大震災の震源断層とされる野島断層（京都新聞社、1995））や、Photo 5（同震災で廃墟と化した神戸市長田区（読売新聞社、1995））のような光景を目の当たりにして、われわれが愕然とするのは、例えば、「戦後最大の犠牲者を出した未曾有の自然災害」といった意味を懐胎した出来事を象徴する光景として、それに対峙するからと言うよりは、そこに展らける光景——崩壊した〈大地〉——が、端的に、想像もしなかった新奇な光景だからであろう⁷¹。言いかえれば、2つの光景はいずれも、直接的に〈大地〉の揺動を体験した者のもとより、そうでない者であっても、〈大地〉という自明、あるいは、第2の〈大地〉とも称すべき建造物を含む街並みという自明を転覆させるのに足るという点で、衝撃的な光景なのである。

先に述べたことの再唱になるが、若干の説明を補っておこう。地震は、〈大地〉の不動的安定という自明を破壊し、大地が揺らぎ、かつ裂けるという世界のありようが可能的であることを明るみにした。そして、それまで想像の埒外にあった諸々の行動（例えば、瓦礫、つまり、破壊された〈大地〉から知人を救出出すという行動）が可能的であることを、人々に覚知させた。言うまでもなく、〈大地〉という自明を形成する規範的規制も、〈空気〉のそれと同様、非常に基底的存在である。つまり、〈大地〉も、〈空気〉と同様、人々の生活世界全般にとって、文字通り、根底的

な基盤をなしている。この点において、〈大地〉崩壊の光景 (Photo 4～5) は、〈空気〉に関わる前掲の3つの光景 (Photo 1～3) と連続性をもつと言えるわけである。

Ⅱ. 〈戦争〉という隠喩

〈空気〉と〈大地〉の連続性を、異なる角度から指摘した興味深い論考が存在する。大澤 (1996) は、1995年に、日本社会に起きた2つの大きな出来事、すなわち、「阪神・淡路大震災 (兵庫県南部地震)」と「地下鉄サリン事件」は、2つの戦争であったと明言している。

地震は、言うまでもなく自然災害だが、兵庫県南部地震をここで「戦争」と呼んだのは、この地震が、マスコミによる報道の中で、あるいは私的な会話の中で、しばしば戦争の比喻によって語られたからである。… (中略) …まぎれもない自然災害である地震に関して、人災の場合のように、その結果に全面的に責任を負う人物や集団を特定することはできない。にもかかわらず、兵庫県南部地震を天災であると言い切ってしまうとなおその断定の内に回収されていない違和感が残るように感じられたのである。この違和感が、人をして、この地震を戦争の比喻で語らせたのだ。(大澤、1996; p. 9-10)

地震にまつわる〈戦争〉の比喻を、具体的に眺めておこう。まず、そこに展開された具体的光景が、戦争のそれと酷似していたという単純な事実がある。Photo 6 (毎日新聞社、1995) は、阪急電車三宮駅屋上からの光景である。これは、先の地震から数えてちょうど50年前、1945年、空襲によって焼け野原となった神戸市である。Photo 5と比較校合するまでもなく、街並みという、第2の〈大地〉の徹底的な破壊が、そこには共通して撮りだされている。



Photo 6 太平洋戦争終戦直後の神戸市三宮界隈

廃墟という物質的世界にわが身を置いた人々がとる行動も、〈戦争〉の比喩を呼び寄せるものとなった。50年前の太平洋戦争を実際に体験した高齢の震災被災者は、直接的に、震災を戦争に擬して語った（矢守，2000a）。また、こうした感覚をフィクションの形式で表現したものも、数多い（車木，1996）。加えて、「民間防衛」（スイス政府，1995）や「大震災サバイバル・マニュアル」（朝日新聞社，1995a）といった、いわゆるサバイバル本が、震災後、爆発的な売れ行きを示したこと（矢守，1999a）は、被災者が余儀なくされた不自由な避難生活が、戦時中のそれと二重写しにされていたことの反映であろう。



Photo 7 阪神・淡路大震災で救援活動にあたる自衛隊

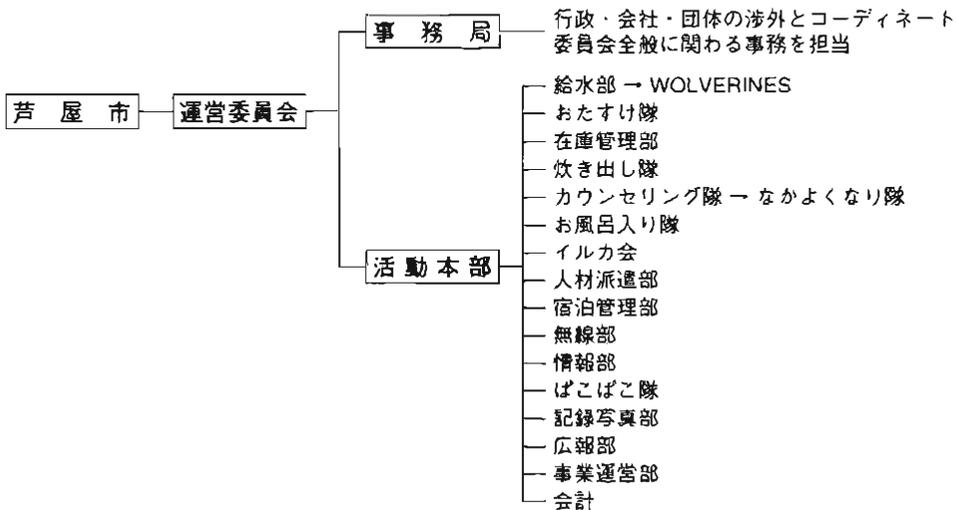


Figure 1 「芦屋市ボランティア委員会」の組織図

救援に向かった人々も同様である。救援活動に駆けまわる自衛隊の制服や車輛は、戦争を彷彿とさせずにはおかない (Photo 7; 朝日新聞社, 1995b)。また、ボランティアという形式で救援にあたった人々にも、自らの活動を、戦争という非常時に即応する軍事組織に類するものとして感受する傾向があったことも指摘できる。その端的なあらわれが、「××隊」、「自警団」といった組織名称、「後方支援にまわれ」、「自転車で伝令を發する」といった用語法、さらには、「××作戦」などの名称が冠されたアクション・プランである。具体例は枚挙にいとまがないので、典型的なものを抜粋すれば、例えば、筆者自身がメンバーとして参画した芦屋市ボランティア委員会は、1995年3月時点で、Figure 1に示した組織構造を呈し、かつまた、そのことを参加者たちがはっきりと自覚していた (芦屋市・芦屋市ボランティア委員会, 1995)。さらに、「仮設総合ケア隊」(北淡町ボランティア事務局, 1995)、「炊き出しゲリラ」(灘ボランティア, 1995)、「ガレキ撤去解隊隊」、「独居老人宅訪問ローラー作戦」(魚崎小学校復興対策本部, 1995; 矢守, 1997)などを指摘することもできる。要するに、多くのボランティアが、未曾有の混乱の中での救援活動を、地震という〈戦争〉との組織的な戦いに擬していたことがうかがえるのである。

では、もう一つの〈戦争〉、地下鉄サリン事件は、どうであったか。

サリン事件は、地震と違って、あからさまに、自覚的に、犯行グループと警察 (あるいは、警察を支持している日本社会のマジョリティ) との間「戦争」と了解された。(大澤, 1996; p.17)

このもう一つの〈戦争〉についても、その具体相を一瞥しておこう。ここでも、まず、その具体的光景が、まさしく戦争のそれであったことを指摘できる。Photo 2に示したように防毒マスクや防護服を着装して救援活動にあたる警官、消防隊員らの慌ただしい様子は、軍隊を想起させるのに十分であった。そして、3月21日朝の事件以後も、ありうべき再犯行に備えて、警察当局による「厳戒体制」は、しばらくの間維持された。

しかし、地下鉄サリン事件が〈戦争〉であったのは、こうした表層的事実にだけ拠るのではない。大澤 (1996)によれば、第1に、街中で猛毒ガスをばらまき罪のない人々を殺傷する行為は、あまりに凶悪にすぎ、「もはや、法の効力の下にある通常の犯罪の範疇に収めることはできず、法の実効性を完全に無視する戦争行為として、つまり社会体制そのものに対する攻撃として解釈されるほかなかった」(p.17)。第2には、事件を引き起こしたとされるオウム真理教団が、「科学技術省」、「防衛庁」といった疑似国家的下部組織をもち、自らを国家に擬していた。彼らは、テロ行為の標的に震ヶ関近辺 (日本政府) を選択し、予言的に信奉する世界最終戦争の前哨的一部として、かかる事件を引き起こしたと推定されている (藤田, 1995)。

こうした犯行グループの姿勢に対して、それに対抗する政府、警察と、それを陰陽に支持した日本社会も、自ずから、一連の出来事を戦争に近いものとして感受していく。人々は、時々刻々、詳細に「戦況」を伝えるマスメディアの報道に釘付けとなり、また、「厳戒体制」下の通勤・通学を余儀なくされる。地下鉄サリン事件の後、さらに、警察庁長官襲撃事件、都庁爆発物郵送事件などが続き、同年1月の阪神・淡路大震災の衝撃もあいまって、「安全神話」の崩壊、政府の

「危機管理」能力の欠如が、深刻な議論の対象となった。こうした社会情勢にあつて、野中広務国家公安委員長（当時）は、「これは犯罪ではなくて、国家間の戦争である」と断じたのである。

では、日本政府、あるいは、日本社会は、いったい何者との間で、この2つの〈戦争〉を戦ったのか。念をおしておけば、単なる自然災害と断定したのでは、その実質をとり逃してしまうように感受された阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）という〈戦争〉と、もはや犯罪とは呼ぶことのできないものとして感覚された地下鉄サリン事件という〈戦争〉——この2つの〈戦争〉を、である。

〈戦争〉とは、結局のところ、一箇の生活世界、割切には、一箇の生活世界をそれたらしめている規範的規制が、総体として動揺・崩壊した状態を表記する隠喩だと考えることができる。〈空気〉、〈大地〉という基底的規範の崩壊が、規範的規制の、総体としての動揺・崩壊を誘発することについては、先述した。〈空気〉、〈大地〉の自明が廃棄された、現行とはまったく異なる世界、楽学舎（2000）の用語を借りれば、現与の生活世界の「無縁圏」へと放逐されていた別なる世界が露呈した世界——これを指示する用語が、〈戦争〉なのである。もっとも、今ある生活世界の彼方に放逐された世界のあり方を示す用語は、定義上、生活世界の中には存在しない。だからこそ、〈戦争〉という現行の生活世界に存在する対象（を指示する言語）は、そうした世界を表示する「隠喩」なのである。

通常的生活世界に定位された戦争においては、戦うべき相手（敵）として、生活世界内に存在する対象（例えば、米国、英国）が、はっきりと特定される——しばしば、「鬼畜米英」といった形式で、内奥神秘化されることはあるけれども。しかし、〈戦争〉での敵は、それとは特定できない〈敵〉である。地下鉄サリン事件の場合、敵は、オウム教団という現実的な対象とされていたが、人々が真に怖れたもの——つまり、真の〈敵〉——は、その背後に潜む（と感覚された）自らの生活世界を指定する規範にどこまでも違背的な何者か、である。大澤（1996）は、「影の部隊」、「裏の暗黒組織」、「真の黒幕」といったものが教団組織の深奥に潜んでいるとする人々の感覚に、その根拠の一端をもとめている。また、阪神・淡路大震災における〈敵〉は、自然そのもの、生活世界の内部に、総体としてそれを馴致することがけっして不可能であるような自然、である。自然は、ある特定の生活世界に生きるほかない人間社会の側の予測と制御を裏切りつづける点で、理想的に純化された〈敵〉であるとも言える。

要するに、まったく異なる世界が存在しうること、言いかえれば、自分たちとはまったく異なる規範的規制、あるいは、それに従属する他者（〈敵〉）が存在しうること——生活世界の「偶有性」（大澤、1996）——を、人々に知らせたのが、〈空気〉の崩壊（地下鉄サリン事件）であり、〈大地〉の崩壊（阪神・淡路大地震）であった。だからこそ、両者は、既成の生活世界における世界内的な示差的区別性に立脚して、それぞれ、事件（犯罪）、災害（地震）と定位されるにとどまらなかったのである。両者は、既往的識別を超えて、共に、〈戦争〉、つまり、隠喩としての戦争として理解された⁸⁾。言いかえれば、事件（犯罪）／災害（地震）という示差的区別が有効であった世界そのものの崩壊、あるいはそれらの区別を実効ならしめていた規範的規制の崩壊——〈戦争〉——として理解されたのである。〈戦争〉は、世界の中の出来事ではなく、世界そのものに関する出来事なのである。

Ⅲ. 「記憶」と「記録」

筆者は、目下、「記憶と記念（あるいは、記録）の社会心理学」という標題で、一連の研究を進めている（矢守, 1999 c; 2000 a; 2000 c; 2000 d; 2000 e; 2000 f）。その鍵概念は、「記憶」と「記録」である。本節では、これまで論じてきたことに依拠して両概念を簡単に位置づけ、本論を閉じることにしたい。以後、Figure 2 に示した概念模式図を随時参照されたい。

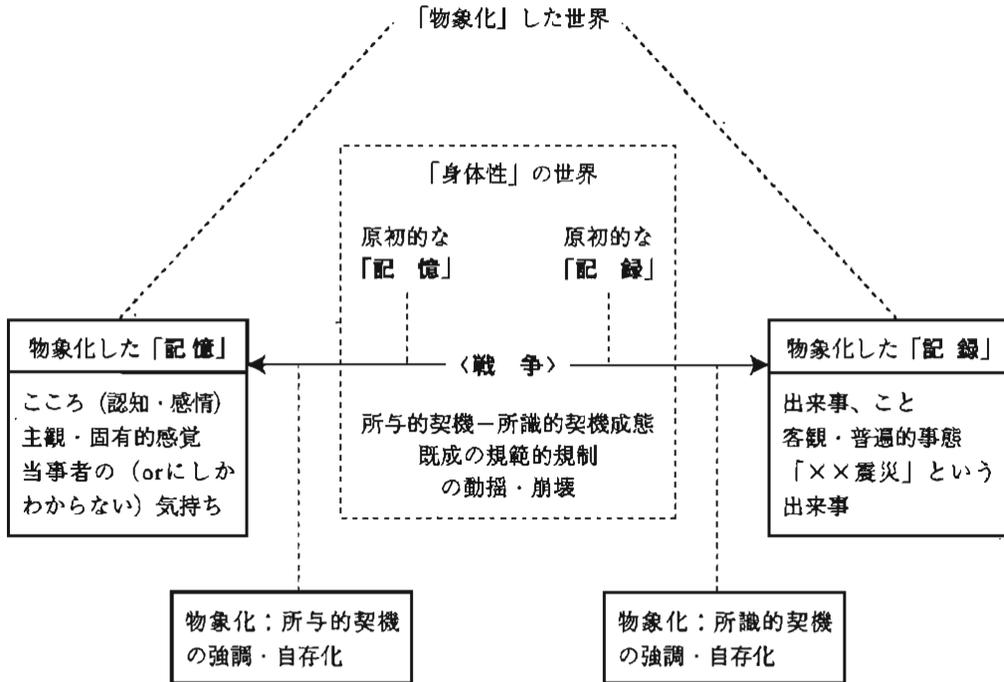


Figure 2 「記憶」と「記録」の概念模式図

筆者は、これまで、上掲の拙稿群の中で、「記憶」とは、体験の「身体性」の保存・伝達を指向すると述べてきた。「身体性」とは、当該の体験の基盤となる言語以前の世界（規範以前の世界）、すなわち、体験者の身体が、周囲の諸身体、事物ともどもに巻き込まれていた、その時その場所での世界の総体性を表示する概念である。この意味での「身体性」は、——本論での用語系に定位して表現すれば——通常的生活世界においては、既成の規範的規制によって隠蔽されている。しかし、それが崩壊し、自らの身体を含む生活世界の構成要素のそれぞれが、そうであるゆえんのところ（意味的契機）が、部分的に、あるいは、総体として崩壊した状態（戦争）の保存と伝達を考慮する場合には、この「身体性」の処遇が焦点となる。

「身体性」が露呈する〈戦争〉において、既成の規範的規制が動揺・崩壊するということは、廣松（1982）の言う「所与的契機—所識的契機成態」が動揺・崩壊することにほかならない⁹⁾。この境位にある体験当事者は、個々の所与的契機（さしあたり、本論でこれまで、具体的光景と

呼んできたもの)の何たるかを指定するための所識的契機(意味的契機)、正確には、両契機の関係性が動揺・崩壊している中で、現与の状況を記述、対象化しようとすることになる。よって、必然的に、上記関係態の前者、つまり、所与的契機がクローズアップされる。すなわち、「あのときここで、××を見た」式に、体験当事者に固有の世界、ひいては、固有中の固有と呼ぶべき主体の内面(心的内部)が顕揚される。出来事の実相ではなく、見掛相が意識内容として自存化し、強調される方向性である。これが、「記憶」の保存・伝達である¹⁰⁾。

「記憶」の伝達は、その時その場に固有の「身体性」の保持・再生を期するという志向性を有する。よって、それが、非体験者(正確には、他者一般)にはうかがい知ることができず、したがって、伝達できないと思念される心的様相(卑俗には、“当事者感情”とされるもの)という線で物象化して理解された場合、伝達不可能なものの伝達を図るという難題を抱え込むことになる。しかし、こうした物象化を抑止し、それ以前の段階にある「記憶」を、より健全な形式で再生・伝達する手段、少なくとも擬似的に再生・伝達を図る手段が存在しないわけではないだろう。例えば、仮に、〈戦争〉における「身体性」の全貌を十全に記憶・伝達することは原理的に不可能だとしても、最低限、後述の「記録」の伝達によってはカバーされていないものが、当該の出来事に含まれていたこと自体—— 喩えて言えば、〈戦争〉があったということ自体—— は伝達可能であろう。もっとも、この点については、本論の域を越えているので、先に列挙した拙稿をご覧ください。

他方、「記録」の保存・伝達とは、相対的に安定した世界(規範的規制)のもとで、すなわち、安定した「所与的契機—所識的契機成態」のもとで、出来事の意味を特定し、その意味を伝達することである。よって、必然的に所識的契機が重視されやすく、体験(者)の固有性を超えて、「××ということが起こった」、「××というものがあった」式に、外的な客体(対象的外部)が、箇々の現相的光景、個々人の心的様相(感情や感覚)に先だって存在したと見なされることになる。箇々に異なる出来事の見掛相は、文字通りに見掛けであって、それとは独立に自存する出来事の実相の伝達が重要だと考えられるのである。ただし、〈戦争〉の当事者が内在する世界では、これまで強調してきたように、「記録」の伝達を保障するはずの、当の規範的規制が揺らいでいる。よって、「記録」を担保する「所与的契機—所識的契機成態」の体系は、外部的(第三者的)にか、もしくは、事後的(回顧的)にか、いずれにせよ、擬似的にしか与えられない。以上のことが、「記録」に、強力な時空的普遍性を与える一方で、当事者世界における如実の体験の保存と伝達を阻みもする。

以上を要するに、「所与的契機—所識的契機成態」こそが、生活世界を構成する基幹的な構造であるにもかかわらず、—— それなりの理由があつてのことではあるが—— 人々は、上記の二重成態が常に相対的な関係態にあることを閑却し、双方の契機を自存化させ、あまつさえ、後者に前者に対する優越性を付与した上で、世界(体験)の保存・伝達を図る傾動を有していると言える。

さて、この点に関連して、かつて、富山(1995)は、その著作「戦場の記憶」の中で、非常に示唆に富む指摘を行なっている。

こうした見方が、戦場体験に対して広く存在している誤解、つまりそれが本人でないといわれない個的な体験だとする見解と、鋭く対立していることはいまでもない。動かしがたい個的な体験を語っているのではなく、語れば語るほど個的な領域が解体してしまう不安定な発話こそ、戦争体験の語りなのである。(P.104)

こうした「戦場＝異常」という認識は、あえていえば、平和運動を含めた戦後における戦争の語り一般に共通するものであり、それは戦争の惨たらしさを主張するものではあるが、同時に戦場の記憶を封じ込める働きをしているのである。(p.131)

本論の視点に結びつければ、富山が、「不安定な発話」として指摘していることは、戦場（戦争）が、まさに、既成の「所与的契機—所識的契機成態」の体系が崩壊した世界だということである。つまり、「戦場の記憶」とは、「戦争」の記憶にほかならず、だから、それは、語ることが困難なのである。この困難に由来する体験当事者の語りのわかりにくさは、しかし、しばしば、両極端へと引き裂かれ、ある意味で、容易に語られてしまう。すなわち、一方では、それは、所与的契機が顕揚される限りで、第三者には了解不能だが当事者にだけは明確な「個的な体験」（体験者の心的様相）であると見なされる。これは、言わば、「記憶」が、その物象化の果てに行きつく先である。他方、それは、所識的契機が自存視される限りで、例えば、「異常」という、既成の意味的契機が無造作に宛られる。この結果、出来事の「身体性」は骨抜きにされ、万人に了解可能で普遍的な、「異常」という言語で指示される事態の一つとして取り込まれる。こちらは、「記録」がもつ、避けがたい一面である。

もっとも、「記憶」にも、「記録」にも、問題点とともに、実践的な有用性も多分に含まれている（永田・矢守（1996）も参照¹³⁾。今後は、本論では、素描にとどまった理論的考察を進めるとともに、なお初発的段階にある現場研究をも進捗させ、2つの伝達方式を、具体的状況に即応して、選択的に、あるいは、相補的に使用することによって、双方を、より有効な形式で活用する方途について模索していきたい。

Summary

The two major incidents in Japan in 1995, the Great Hanshin-Awaji Quake and the Sarin Gas Attack Case, as well as the Photochemical Smog Scare Case (1970), were often compared to "war" both in public and private discourses. This should not be simply attributed to the superficial fact that these three cases commonly evoked distressing and dreadful spectacles like those caused by war. "War" was used in common to the above three cases as a metaphor indicating an unstable life-world where existing meaning system is partially or totally damaged. This is equivalent to a life-world where "two-fold relational figure" (Hiromatsu, 1982), composed of a "phenomenal-given" (presented itself at a specific spatial and temporal location) and a "significant-known" (irreal or ideal entity beyond time and space), is damaged. This suggests that "war" can be remembered and recollected either by emphasizing the former moment of the relational figure (i.e., "memories") or by emphasizing the latter moment

(i.e., "records"). These two ways are sharply contrasted. "Memories" are derived from shared or private perceptual experiences while "records" are derived from shared conceptual propositions. Both should be used together since one's advantages can supplement the other's disadvantages.

注

- 1) 筆者が、この写真に注意を促されたのは、「戦後科学技術と民衆意識」研究会（代表：高坂健次、後藤邦夫両氏）の席上であった。記して、感謝申し上げたい。
- 2) 一方の「異質性」の基盤は、それぞれの出来事を、相互に弁別可能な別箇の出来事として認識させる意味的契機、言い換えれば、「光化学スモッグ」、「サリン事件」、「臨界事故」という言語的能記に対応する意味的契機である。この点については、Ⅲ節で後述する。
- 3) 楽学舎（2000）は、ここで論じている、防毒マスクを装着しての呼吸（あるいは、防毒マスクを通して呼吸される空気）を、「無縁圏」へと廃棄された集合的行動、と称している。
- 4) 「規範」という用語は、大澤（1990）の語法に従っている。社会（心理）学界において、通念に準じて使用されている語義とは異なり、より包括的な意味で用いられている点に注意されたい。ここでの語法について、簡明な説明が、楽学舎（2000）にある。
- 5) 田並（1995; 1997）によれば、光化学スモッグは、社会問題化した1970年当時、毒ガス、ゲリラガスとして報道され、東京都公害研究所所長の不用意な発言が、「ガスマスク発言」として問題視される一幕もあった。また、読売新聞は、「空気がなくなる」という刺激的なタイトルを冠したシリーズ記事を掲載した。さらに、東京銀座には、50円で1分間3000ccの酸素を吸える「酸素自動販売機」まで登場した。これらの事実は、いずれも、光化学スモッグもまた、〈空気〉に脅威を与える出来事であったことを明示している。
- 6) 本節で指摘した〈空気〉に関連して、泉麻人のコメントに配視しておこう。泉（1990）は、マスメディア報道とそれに振りまわされる民衆を揶揄したエッセイの中で、異臭騒ぎを大仰に報道する新聞記事を引用した後、次のように述べている。「こういう記事を読むと、つくづく東京はもちこたえているなあ、と思う。このスモッグ騒動のときも、5年後、昭和45年に突如ヴァージョンを変えて出現した光化学スモッグ騒動のときも、最初はいつも、『この世の終わり』とばかりに大袈裟に報道される。…（中略）…しかしそれから20余年が経過したいまでは、スモッグも、あの光化学スモッグでさえ、天気予報の最後の「今日は光化学スモッグが発生しやすいので注意しましょう」といったコメントをのんきに聞き流しているような状況である。新たなスター「花粉」におされて蔭が薄い」（p.108-109）。このユーモラスな随想が、われわれの見地からして秀抜なのは、通常、異質の出来事として相互弁別的に認識される、異臭騒ぎ、光化学スモッグ、花粉症という3つの出来事が、人々の如実の認識相にあっては、類同の存在としてある可能性が洞察されているからである——だからこそ、一方が他方にとって代わることができる。これら3つの出来事も、本文で取りあげた事例と同様、根源的には、〈空気〉の自明性の崩壊を通して日常の生活世界を動揺させる点で、また、表層的には、そのことを象徴的に具現化した具体的光景——例えば、（防毒）マスク——を随伴する点で、「共通性」を有する。
- 7) 再び、楽学舎（2000）に依拠すれば、それが「無縁圏」へと廃棄されていた光景だから、と解釈できる。
- 8) ちなみに、田並（1997）の興味深い論考は、Ⅰ節で取りあげた光化学スモッグ事件もまた、あからさまに〈戦争〉と感覚された事実を指摘している。例えば、美濃郡都知事（当時）は、「自動車公害との全面戦争」を宣言し、終戦の日に刊行された新聞記事（「来るかガスマスク時代」（「朝日新聞」1970年8月15日付））には、前節で紹介した「ガスマスク発言」に対して、「戦争中の亡霊を見る思い」とする意見や、スモッグの注意報・警報を聞いて、「戦争中の空襲警報のときを思いだした」とする感想が掲載されている。

もつとも、より重要なことは、光化学スモッグが、当初、原因不明の不可解な事象としてあらわれたという事実である。なぜなら、それは、光化学スモッグ事件（として事後的に同定される一連の出来事）の意味が、少なくとも発生当初は、既存の規範的規制、言い換えれば、社会的表象の体系によっては馴致できないunfamiliarな事象であったことを示すからである（矢守, 1999b; 2000b; 印刷中; Yamori, 1999）。田並によれば、当時、光化学スモッグの原因として、集団ヒステリー説、日射病説、試験づかれ説などが乱立し、はては、幻の公害説まで飛び出した。

- 9) ここで臆断的に断定した、この提題については、詳細に論じた別稿（矢守, 準備中）を執筆中である。
- 10) 「大切なのは、同じように思うことではなく、同じものを見ること。そこから差異を確認し、なぜ違うのか、という対話が生まれる」という大西（2000）の弁は、「記憶」における所与的契機の顕揚を、よく反映している。そこでは、“同じように思うこと”（所識的契機）の困難もしくは不可能が指摘される一方で、“同じもの”（所与的契機）の存在が前提にされているからである。
- 11) 永田・矢守（1996）の用語法に依拠すれば、「記憶」は、知覚現場の判断に由来する「事象」、もしくは、「事象的事態」の保存と伝達を志向し、他方、「記録」は、概念思考的判断に由来する「（狭義の）命題的事態」の保存と伝達を担う、と位置づけることができる。

引用文献

- 朝日新聞社 1995a 大震災サバイバル・マニュアル 週刊朝日臨時増刊（1995.3.15）朝日新聞社
- 朝日新聞社 1995b アサヒグラフ臨時増刊（1995.2.1）「関西大震災」朝日新聞社
- 芦屋市・芦屋市ボランティア委員会 1995 芦屋の街大好き——ともに生きた日々——芦屋市ボランティア委員会
- 藤田庄市 1995 オウム真理教事件 朝日新聞社
- 廣松 渉 1982 存在と意味（第1巻）岩波書店
- 北淡町ボランティア事務局 1995 北淡町ボランティアの97日間 北淡町ボランティア事務局（未公開資料）
- 泉 麻人 1990 B級ニュース図鑑 新潮文庫
- 車木蓉子 1996 五十年目の戦場・神戸 かもがわ出版
- 京都新聞社 1995 特別報道写真集——阪神淡路大震災——京都新聞社
- 毎日新聞社 1995 毎日ムック——戦後50年——毎日新聞社
- 灘ボランティア 1995 灘ボランティア本部各部隊紹介（未公開資料）
- 永田素彦・矢守克也 1996 災害イメージの間主観的基盤 実験社会心理学研究, 36, 197-218.
- 大西若人 2000 記憶を伝える風景：沖縄・兵庫——喪失と創造と 朝日新聞（2000年3月31日付）
- 大澤真幸 1990 身体の比較社会学Ⅰ 勁草書房
- 大澤真幸 1996 虚構の時代の果て——オウムと世界最終戦争 ちくま新書
- 楽学舎 2000 看護のための人間科学を求めて ナカニシヤ出版
- スイス政府 1995 民間防衛 原書房
- 田並尚憲 1995 光化学スモッグ事件と民衆意識 「戦後科学技術と民衆意識」研究会レジュメ（1995.4.22）
- 田並尚憲 1997 光化学スモッグ事件 「戦後科学技術と民衆意識」研究会レジュメ（1997.4.5）
- 富山一郎 1995 戦場の記憶 日本経済評論社
- 魚崎小学校復興対策本部 1995 解援隊プロジェクト始まる！せせらぎ（創刊号）（未公開ミニコミ紙）
- 矢守克也 1997 阪神大震災における避難所運営——その段階的変容プロセス——実験社会心理学研究, 37, 119-137.

- 矢守克也 1999a 阪神・淡路大震災——社会システムの崩壊と再生——中山茂（編集代表）／後藤邦夫・吉岡斉（責任編集）「通史：日本の科学技術〈国際期〉1980-1995」学陽書房 p.1037-1047
- 矢守克也 1999b 〈活断層〉に関する研究Ⅰ——序報：アウトライン 日本社会心理学会第40回大会発表論文集, 94-95.
- 矢守克也 1999c 記念と記憶の社会心理学——Talks on a Fault: 断層上の語り——日本グループ・ダイナミックス学会第47回大会発表論文集, 32-33.
- 矢守克也 2000a 災害体験の記憶と伝達 やまだようこ・南博文・佐藤達哉（編）「カタログ現場心理学」金子書房 14章
- 矢守克也 2000b 〈活断層〉に関する研究Ⅱ——社会的表象理論と地震前兆証言——日本社会心理学会第41回大会発表論文集
- 矢守克也 2000c 記憶と記念の社会心理学Ⅰ——身近な死についての語り——奈良大学紀要, 28, 159-168
- 矢守克也 2000d 記憶と記念の社会心理学Ⅱ——「劇団青い森」の公演をめぐって（その1）——日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 261.
- 矢守克也 2000e 記憶と記念の社会心理学Ⅲ——「劇団青い森」の公演をめぐって（その2）——日本心理学会第64回大会発表論文集, 170.
- 矢守克也 2000f 記憶と記念の社会心理学Ⅳ——モノ語りと修学旅行——日本グループ・ダイナミックス学会第48回大会発表論文集, 88-91.
- 矢守克也 印刷中 社会的表象理論と社会構成主義——W.Wagnerの見解をめぐって——実験社会心理学研究, 40（2000年12月刊行予定）
- 矢守克也 準備中 事故・災害の認識構造に関する理論的考察（未公開）
- Yamori, K. 1999 How have "active faults" emerged into everyday lives in Japan? Proceedings of the Third Conference of the Asian Association of Social Psychology, p.28
- 読売新聞社 1995 読売報道写真——阪神大震災全記録——読売新聞社